

## VIVO

8&amp;9

AUGUST / SEPTEMBER  
2007

## CONTENTS

|                   |     |
|-------------------|-----|
| 渋さ知らズオーケストラ ..... | 1、2 |
| 茨城の名手・名歌手たち ..... | 2   |
| ブルーズの肖像(1) .....  | 3   |
| 最近の公演から .....     | 4   |
| ネットマ .....        | 5   |
| インフォメーション .....   | 6   |



写真上;渋さ知らズオーケストラ

下;ルツェルン・フェスティバル・アカデミー(2005)より

ビエール・ブルーズとアカデミー参加者たち Photo:Priska Ketterer

まんだら  
めくるめく音楽曼茶羅。至福の祝祭空間。  
8 / 10(金)渋さ知らズオーケストラ

ふたたび水戸市民会館が桃源郷に。

昨年の夏、水戸芸術館音楽部門が企画し、水戸市民会館で実施する演奏会企画の第一弾として行われたコンゴのバンド『コノノNo.1』の演奏会。電気親指ピアノの強烈なグルーブに、会場全体が揺れたあの一夜を、ご記憶の方も多いことでしょう(コノノNo.1はその後アイスランドの歌姫ビヨークのニュー・アルバム『ヴォルタ』に参加するなど、さらなるブレイクを遂げています)。そしてお待ちせしました、シリーズ第二弾としてこの夏お届けするのは、日本が世界に誇る歓喜と熱狂の音楽集団、『渋さ知らズオーケストラ』です!

と、強気な感じで出てみましたが、正直、誇張でもなんでもありません。昨年の1月に Shibuya O-EASTで行われたライブDVD『渋旅初め』をご覧いただければ、全音楽ジャンルを通じ「今、日本が世界に誇れるもの」のリストの中に、渋さ知らズは間違いなく入る、と実感できるはず。実は、この原稿を書くために、私はあらためてこのDVDを観直したばかりなのですが、観るのは二度目なのに、興奮で手の震えがおさまらないという有様です。いったい、どうしてこのようなライブが可能なのか。この、心の底からきりも無く湧き上がる幸福感は、いったい何なのか。

渋さ知らズ、その歓喜のスパイラル

正直なところ「あととはにかく聴いて、観てください、そうすればなにもかもわかります」と言ってしまうところ。この怪物的集団は、生半可な言葉など飲み込んでしまう巨大さと、懐の深さを備えています。しかしそれでも、なにかの手がかり

になることを望んで、言葉で彼らに迫ってみることにしましょう。以下、彼らの歴史についての記述は、陣野俊史『渋さ知らズ』(河出書房新社)を参考とさせていただきます。

まず、そもそも「渋さ知らズ」とはいかなる音楽ジャンルに属するのでしょうか。彼らを分類するほど空しいことはないのですが、ひとまず、テーマとアドリブをその音楽的基礎に置くという点で、彼らはジャズである、と無理やり定義することもできません。実際、グループの中心人物(本人によれば「ダンドリスト」)である不破大輔は、結成当時気鋭のジャズ・ベーシストとして活躍していました(もちろん現在も)、メンバーを見て凄腕のジャズ・ミュージシャンが何人も名を連ねています。しかし、一般的なジャズ・グループと、「渋さ知らズ」は、その出生からして全く違う様相を呈していました。渋さ知らズが活動を開始したのは1989年ですが、その母体となったのは、「発見の会」という劇団の芝居の伴奏のために集まったミュージシャンたちでした。当初から演劇と濃厚に関係があったことは、渋さ知らズのその後の活動を解く重要な鍵です。メンバーはジャズ系(テナーサックスの片山広明ら)、ロック系(ベーシスト、ヒゴ ヒロシら)などさまざまな分野の人材が集まり、さらに楽器を演奏しないセリフのみのメンバーも加わっていました。さまざまなジャンルを包含し、シアトリカルな側面も備えた「渋さ知らズ」の本質は、すでにこの時点で形成されていたのでした。

その後、ダンサー、舞踏、舞台美術(舞台上のオブジェ等)を加え、多数のミュージシャンが頻繁に出入りし、混沌としたアナキーなステージを

繰り広げていたという初期の時代を経て、97年頃には渋さ知らズにとって「第二世代」と呼ばれる若手のミュージシャンが多数加わり、アンサンブルはより整理され、洗練へと向かいます。それと機を一にしてドイツのメルス・ジャズ祭に出演するなどヨーロッパ公演を行って大評判となり、2001年のフジ・ロック・フェスティバル初出演以降国内でもブレイク、現在エイベックス・イオからCDやDVDが発売されるなど、破竹の勢いで進撃中です。

彼らのステージはどのようなものでしょう? まず、「渋さ知らズオーケストラ」は、「渋さ知らズ」の大編成ヴァージョンであることを特記しておく必要があるでしょう。これに対し小編成の場合は「渋さチビズ」となります。これらの総称として、「渋さ知らズ」があるのです。

「渋さ知らズオーケストラ」の編成は、サクソフ、トランペット、トロンボーンといったホーン・セクションと、ギター、ベース、キーボード、ドラムス、パーカッション等からなります(今回の公演において音楽家は22人の予定)。いわばジャズのビッグ・バンドという感じですが、音楽の内容はもちろん違います。曲の大部分は不破大輔氏が書いていますが、どれも比較的短い、シンプルなテーマからなっています。このテーマがユニゾンで奏されるのですが、これがなんと覚えやすくて耳に残る、心憎いものばかり。ライブの最後に演奏され、観客と一緒にコーラスする本多工務店のテーマは有名です。時に昭和歌謡か!というくらい下世話なまでにキャッチーな曲もあって(火男など)楽しいですが、一方で股旅のように、1970年代のキース・ジャレットやチック・コリアもかくやとい



左から;DVD『渋谷初め』( 昨年の Shibuya O-EASTでのライブ。文中参照 ) [ エイベックス・イオ I0BD21035 ] / 陣野俊史『渋谷知らズ』( 河出書房新社 ) \*以上2点をはじめ、水戸芸術館内ミュージアム・ショップ「コントロール」にて、渋谷知らズのCD等多数発売中!



「茨城の名手・名歌手たち 第18回」出演者  
左から; Duo La Bilancia、桑名奈津子、大木 円

う叙情的かつ高揚感にあふれた名旋律も出てきます。こうしたテーマの後に、メンバーのアドリブが次々と現れるのですが、そのプレイはどれも壮絶そのもの。バックに回るメンバーもさまざまに絡んでいきますし、手に汗握る迫力です。しかし、テーマ・メロディ部分のリズム・パターンがうねるようなグルーブでソロを支えているので、聴き手は眉根を寄せてソロを聴くというより、いっそうの解放感へと導かれていくのです。「ダンドリスト」の不破氏は不思議な指揮ぶり、アンサンブルを煽ったと思えば座ってにこにこしながらアドリブを聴いている。しかし、彼の手が一閃すると、アンサンブルはまったく違うリズムに瞬時に切り替わり、別世界に突入していきます。この千変万化ぶりは「凄い」と唸るしかありません。いきなりボサノヴァっぽくなったり、スカ・ビートになったり…。やがて、ギターがジミ・ヘンドリックスやビート・コーギーをもっと過激にしたようなソロをくり広げ、このままだとこまで行くのか…とっていると、いつの間にかテーマ・メロディを支えていたリズム・パターンがじわじわ盛り上がっていて、あっと思った

時にはふたたびユニゾンのテーマになだれ込む! 尋常ではない盛り上がり興奮です。しかもあくまで音楽的。1曲の演奏時間はまちまちですが、長いときは余裕で20分、30分! ジャズという音楽がこの世に初めて生まれてきたときの高揚感、こういうものだったのではないかと、思わせます。そして、彼らの舞台は、音楽にとどまりません。妖艶なドレスに身を包んだ2人の女性ダンサーズ(ユニット名は「乳房知らズ」)が踊り、白塗りの舞踏家たちが怪しく音楽にからみ、法被を着たふんどし一丁の男が演歌口調で客席を煽り、そして舞台の背景ではライブ・ペインティングが行われ、クライマックスでは巨大なオブジェが宙を舞う(舞台監督&美術の安部田保彦氏の存在は重要です)。踊り・演劇・美術・大衆芸能、これらが音楽と共に一つの舞台の中で渦巻き、歓喜のスパイラルとなって熱狂へと客席を導いてゆくの。2時間30分に及ぶ彼らのライブは、しかし終わってみるとあっという間。言葉の最高の意味での、至上のエンタテインメントといえましょう。

洪さの中で、すべてはひとつになる

冒頭で私は渋谷知らズのことを「日本が世界に誇る」と書きました。そう書いたのは、音楽とステージのすばらしさもさることながら、異なるジャンルの音楽(ジャズ、ロック、ファンク、ワールド・ミュージック、演歌等)や舞台を、おおらかに飲み込んでしまうその懐の深さのためでもあります。さまざまな異文化を貪欲に吸収してきたこの日本という国。「渋谷知らズ」は、そのような日本の特色の、最良のあらわれのひとつだと言えないでしょうか。いわばそれは、多種多様な音楽や文化がぐつぐつと煮えている巨大な鍋。素材一つ一つの味わいをしっかり楽しめると同時に、それらすべての味わいが溶け合った極上のスープでもある…対立と緊張が日常化しているこの地球上において、「渋谷知らズ」のステージは、文化や価値観の違いを超えた、人々がひとつに結ばれる夢を見させてくれるのです。さあ、8月10日、その夢を水戸市民会館で、共に分かち合ひましょう!

《矢澤》

## 精鋭ぞろいの「名手・名歌手たち」によるガラ・コンサート!

9 / 8 (土) 茨城の名手・名歌手たち 第18回 司会: 畑中良輔

水戸芸術館開館以来、毎年継続して開催し、今年で第18回を迎える「茨城の名手・名歌手たち」。今年は、管楽器・打楽器・声楽・器楽アンサンブル各部門を対象に5月6日(日)にオーディションを行い、6人(ソロ)と1組(器楽アンサンブル)が9月8日(土)の本演奏会への出演を決めました。(出演者・曲目の詳細は、同封のチラシをご参照ください。)

オーディションから約4ヶ月、成長の歩みを止めない「名手・名歌手たち」は、一段と大きくなった姿をステージで見せてくれるに違いありません。

演奏会は、ピアノ・デュオの華やかな響きで始まります。Duo La Bilancia(第1ピアノ:長澤順さん、第2ピアノ:清水美和さん)がラフマニノフ:2台のピアノのための組曲第2番(抜粋)を演奏します。実は昨年この企画で、長澤さんはオルガニストとして、清水さんはピアニストとして、それぞれソロ出演されました。このお二人がどのようなデュオを聴かせてくれるのか、期待大です。

2番手はフルートの桑名奈津子さんで、尾高尚忠:フルート協奏曲。オーディションでこの曲を演奏し、その透明なフルートの音色と確かな技術が

高く評価され、審査委員の先生方から「本演奏会でもぜひこの曲を」と熱望されました。本演奏会では全曲がピアノ伴奏で演奏されます。

3番手はメゾ・ソプラノの大木円さん。ブラームスの歌曲とメロッティのアリアという構成はオーディション時と変わりませんが、ブラームスの歌曲を2曲増やしての出演です。深々とした歌声と豊かな声量で聴くブラームスの歌曲は格別ですが、一転してメロッティでのオペラティックな表現もまた聴き逃しません。

4番手はチューバの菅田真文さんで、ワイルダー:チューバとピアノのための組曲第1番 象のエフィー。この曲もオーディションで演奏され、審査委員の先生方の強いリクエストにより本演奏会でも取り上げていただくことになりました。小象のかわいらしい物語をチューバがどう表現するか、とても楽しみです。

5番手はバリトンの小橋琢水さん。4年前(2003年)の第14回に続き、2回目の出演です。オーディションでは、ロッシェニ:セピリヤの理髪師から「私は町の何でも屋」を圧倒的な声量で楽しく聴かせてくれましたが、本演奏会で取り上げ

るのはシューマン:歌曲集 ミルテの花(抜粋)。一転して、ドイツ・リート繊細な心理的表現に耳を傾けましょう。

6番手はフルートの大山真理佳さん。オーディションでメシアンの黒つぐみを演奏して高く評価された大山さん、本演奏会ではさらにもう1曲、ブーランクのフルート・ソナタを加え、近現代フランスのフルート音楽を堪能させてくれます。その多彩なフルートの音色にご注目ください。

演奏会を締めくくるのは、ソプラノの財木麗子さん。オーディションで歌い、清らかな歌声を響かせた「月に寄せる歌」(ドヴォルジャーク:歌劇 ルサルカから)に、ジプシーの歌や愛の歌からの歌曲を加え、ドヴォルジャークの歌の魅力をつぶりと聴かせてくれます。

個性豊かな出演者の顔ぶれに、変化にとんだ多彩なプログラムが楽しめる演奏会になりそうです。司会は、オーディション審査委員長を務めた畑中良輔氏。その名解説もあわせてお楽しみください。次代の「名手・名歌手たち」の誕生を期待しましょう。

《関根》



ルツェルン・フェスティバル・アカデミー(2005)より  
Photo:Priska Ketterer



「茨城の名手・名歌手たち 第18回」出演者  
左から、菅田真文、小橋琢水、大山真理佳、財木麗子

## ブルーゼの音楽(その1) 現代に生きる私達が、根源的な問いを前にして 9 / 14(金)ブルーゼの肖像

### 芸術作品の革新性

モーツァルトの生きた時代に、モーツァルトの音楽はあまり知られていなかった。ベートーヴェンの生きた時代に、ベートーヴェンの音楽はあまり知られていなかった。マーラーの生きた時代に、マーラーの音楽はあまり知られていなかった。そして現代。ブルーゼの生きる時代に、ブルーゼの音楽はあまり知られていない……。

優れた作曲家の作品は、時間を越え未来の聴衆たちを魅了し続ける一方で、その作品が生み出された同時代の聴衆には、なかなか受け入れられないということが、これまでの音楽史を紐解いてみると分かります。現代作品は、それまでには無かった新しい価値観や美的世界を追求するという革新的・先進的な性質をもっているために、同時代人がそれを鑑賞するためには、既存の価値観や音楽の成り立ちについての理解などはいったん棚上げ、新しい尺度を探さなくてはならない場合が多いです。このように、同時代の聴衆が現代作品を受け入れるためには、自由で革新的な耳と精神が必要であるが故に、現代作品は万人に愛されることが難しい存在なのだと思います。しかし、そうだからと言って私達が、既にある程度価値付けされた歴史的な作品の享受に終始してしまい、現代作品は自分達のものではなく未来の聴衆のためのものだからと片隅に追い払ってしまうのは、あまりにももったいないことです。なぜならば、優れた現代作品は、時代を映す鏡であり、人生の意味、死、希望など、命に関わる根源的な問いに対する、現代人の探究の足跡が刻印されていると考えるからです。芸術作品が宿命として持つ革新性の背景には、現状では掴み得ない自身の存在についてなどの根源的な謎を、新しい次元に移行することでその答えを見つけないという、人類の切実な望みが託されていると思います。したがって、私達が現代作品を前にして、既存の価値観から新しい価値観へと発想をシフトすることは、未だ掴み得ぬ真理探究のためのひとつの方策であると言えるのではないのでしょうか。つまり、私達は、現代作品の革新性に触れることによって、今は分かっている、「自分の存在とは何なのか」、「生きること、死ぬことの意味とは何なのか」といった根源的な問いに対する答えを探

すヒントがそこにはあるかもしれませんが、この点こそが、私達が現代作品に接することの最大の意味なのではないかと筆者は考えます。

### 同時代作品を評価するということ、そしてブルーゼ

芸術作品に限ったことではないですが、物事を評価するために必要なのは客観性であり、当事者からは距離を置いた、いわゆる傍観者の視点を持たなくてはなりません。ところが、私達が生きる同時代の作品を今日評価するということは、私達は時代を共有する当事者以外の何者でもなく、距離を置いた客観的な視点は持ち得ないために、とても難しいことであると言えます。したがって、現代に活躍する作曲家の中で、一体誰が歴史に名を残すのかを言い当てることは難しいことかもしれません。しかし、少なくとも同じ時代に生きる人たちがどの作曲家を最も重要と考えているかということは指摘できると思います。

そして、第二次世界大戦後、音楽の未来を切り拓くために、先頭を走り続けてきた作曲家として、最も重要な存在であると同時に時代の人々から評価されているのが、フランス人のピエール・ブルーゼです。バリ音楽院でブルーゼに和声学を教えたオリヴィエ・メシアンは、しばしばブルーゼと音楽の未来について語り合ったそうです。ある時、ブルーゼが「いったい誰が、誰が音楽がはまりこんでしまった問題から音楽を救い出すのでしょうか。」と憤慨して語ったことに対して、「なんですって、ブルーゼ、それはあなたですよ」とメシアンは返答したという逸話があります。また、大戦後のフランスといえば、現代西洋の知性を代表する思想家が多く輩出されているのですが、その中心人物であるロラン・バルト、ミシェル・フーコー、ジル・ドゥルーズという面々は皆、ブルーゼと親交を持ち、その創作に一目を置いています。

### 前衛音楽の旗手

さて、戦後の前衛音楽の潮流の中で、ブルーゼがいかに重要な存在であったのかについて、簡単にご紹介したいと思います。戦後の前衛音楽の創作に大きな役割を果たしたのが、ドイツのダルムシュタット国際現代音楽祭でした。終戦の翌年

である1946年に、音楽学者のヴォルフガング・シュタイネケの尽力により、まだ復興されていないダルムシュタットの街中の様々な建物を利用して開始されました。この講習会は、単に作曲技法を伝授するような性格のものではなく、新しい創作の理念と手段の開拓が目的とされました。講習会では20世紀前半の作曲家や技法が順に取り上げられていき、最終的に若い世代の心を捉えたのは、バルトークでもストラヴィンスキーでもヒンデミットでも、さらにはシェーンベルクでもなく、ヴェーベルンの音楽でした。その影響下に、メシアンが49年のダルムシュタット滞在中に作曲したのが「音価と強度のモード」です。シェーンベルクの案出した十二音技法においては、音のパラメーターである「音高」「音価(持続)」「強度」「音色」のうち、「音高」のみがセリー(列)の方法を適用することによる組織化が実現されていました。ヴェーベルンの後期作品では「音高」に加え「音価」にセリーの技法が用いられていて、この点がダルムシュタット世代の関心を惹きつけたのです。そして、メシアンは「音価」と「強度」のパラメーターまで、セリー的な操作の領域を広げてみせたのです。ダルムシュタットでこのメシアン作品を聴いた若き日のブルーゼは多に触発され、51年「ポリフォニーX」、52年「構造I」を発表します。ブルーゼのこれらの作品こそ、「音高」「音価(持続)」「強度」「音色」という音のパラメーターのすべてがセリー的に扱われた最初の作品のひとつであり、これらは全面的セリー音楽(セリー・アンテグラル、もしくは、総音列主義)と呼ばれました。この技法こそ、伝統的な調性音楽にかわり、新時代の音楽を実現するための新しい作曲技法として期待され、50年代の前衛音楽の大きな潮流を作り出す原動力となったものです。しかしこの方法は、強度に数理的な合理性をもつ一方、そこから生み出される表現は規格的となってしまうなどの欠点を持つことが明らかとなり、60年代以降はあくまで作曲家が選択し得る技法のひとつとして、創作の主流からは外れていくことになりました。

それでは、全面的セリー音楽を乗り越えてブルーゼはどのような音楽を創っていったのか? 続きは次号のvivo(9&10月号)で紹介させていただきますと思います。どうぞお楽しみに! 《中村》

## 最近の公演から

JUNE



1



2



3



4



5



6



7



8

水戸室内管弦楽団第68回定期演奏会  
(6月9日、10日)

第65回定期演奏会以来1年ぶりの、指揮者をおかないアンサンブルによるプログラム。今回は、前半がヘンデル：合奏協奏曲集 作品6から 第5番 二長調、C.P.E.バッハ：フルート協奏曲 二短調 Wq.22 (フルート独奏：工藤重典) ポツケリニ：チェロ協奏曲 二長調 G.478 (チェロ独奏：<sup>チョウチン</sup>趙 静)という18世紀の協奏曲3曲。そして後半はベートーヴェン：弦楽四重奏曲 第13番 変ロ長調 作品130(弦楽合奏による)という大曲、と好対照をなすプログラム構成。しかも前半の3曲もそれぞれに特徴的な作品であり、メンバーは長い時間をかけて徹底的に練習し、最良の音楽をめざした。前半3曲では、特に独奏者たちと合奏とのバランスに配慮が図られ、さまざまな配置が試された。演奏会をご覧になられた方はお気づきの通り、ヘンデルはMCO史上はじめて、チェロとチェンバロを除く全員が立って演奏した。ちなみにこの曲では、楽章配列も一部変えている。そして、ベートーヴェンの後期弦楽四重奏曲の中でも至難な作品を弦楽合奏で演奏するにあたり、新しくMCOメンバーになった豊嶋泰嗣のコンサートマスターのもと、メンバーはいつさの妥協なく長時間にわたる練習を行った。その成果は、多くのお客様から絶えることなく送られた拍手の熱さが、雄弁に証明していたといえるだろう。なお、6月9日には演奏会と並行して、NHK水戸放送局の協力により、千波湖畔ふれあい広場にて大スクリーン・コンサートが実施され、約1,800人の方々が見学した。同時にこの日の演奏会は、NHK茨城県域デジタル放送で生中継されている。また6月7日には学生のための公開リハーサルを実施、水戸市内の小・中・高校10校、約150人がリハーサルを見学した。《矢澤》アンケートから 水戸に足を運んで2回目ですが、清れつな響きとすばらしいアンサンブルに魅了されっ放しです。ホールもすばらしいです(愛媛県八幡浜市：J.U.さん) アンサンブルが圧巻でした!! いつもながらに感動致しました(千葉県佐倉市：E.T.さん) 毎回、最初の音がひびくと空気が変わって涙が出る。あっという間に2時間がすぎてしまう。特に最初のヘンデルが良かった(無記名の方) フルードは、工藤さんみたいにじょうずにひけたらいいと思います(水戸市：M.H.さん10歳)

チョウ・チンさんのチェロ協奏曲がよかったです。演奏家と客席とオーケストラの三位一体の対話が、とても素晴らしかったです(東茨城郡：Y.I.さん) とくにベートーヴェンがすばらしかった。豊嶋さんの音色のリードが、全体をつつんでいて、今まで一番すばらしい演奏会でした(無記名の方) 全てを包み込むような穏やかなカヴァティーナ!! Quartettでは出せない持味だ。これを聴けただけでも至福の極みだ(水戸市：S.M.さん)

水戸室内管弦楽団第69回定期演奏会  
(6月23、24日)

ゲスト・コンサートマスターにライナー・クスマウルを迎えての演奏会。すでに5度目の共演となり、クスマウルとMCOのメンバー達とは、もはや旧知の仲とも言えそうなほどの親密ぶりだ。プログラムは、ロッシェニの 弦楽のためのソナタ 第1番、ヴィオッティの ヴァイオリン協奏曲 第22番、モーツァルトの セレナード 第6番『セレナータ・ノットルナ』、ハイドンの 交響曲 第44番『悲しみ』の4曲。ヴィオッティ作品の独奏はクスマウルが、モーツァルト作品の独奏はクスマウル(第1ヴァイオリン)、潮田益子(第2ヴァイオリン)、今年6月から新メンバーとなった川本嘉子(ヴィオラ)、ペトル・イウガ(コントラバス)が務めた。ドイツ・オーストリア音楽の伝統が培った、西洋の合理的な精神に裏付けられた演奏表現と言うものを、クスマウルはMCOの演奏に持ち込んでいるように思える。その結果、とても調和のとれた、精巧で、しかし温かみのある演奏というものが、創出されていると感じる。

6月21日には、水戸市内の小学生から大学生までおよそ200名をコンサートホールに招いて、およそ1時間の公開リハーサルを実施した。なお、ヴィオッティの演奏後、クスマウルがアンコール曲を演奏した。作品名は次の通り。[23日] J.S.バッハ 無伴奏ヴァイオリン・パルティータ 第3番 ホ長調 BWV1006 より「ガヴオット」、[24日] J.S.バッハ 無伴奏ヴァイオリン・ソナタ 第1番 ト短調 BWV1001 より第1楽章。また、開演に先立ち、エントランスホールで工藤重典、水野信行をはじめとする管楽器奏者9名によりグノーの 小交響曲 変ロ長調 の抜粋が演奏された。《中村》アンケートから クスマウルさんは、すっかりおなじみになった感じですね。演奏は、輝くような音が哀調を帯び、とてもすばらしかったです。(R.A.さん) ロッシェニでのコントラバスのソロがとてもよかったです。あんなに軽快に弾くことができるんですね! ハイドンがもう最高! もともと交響曲第44番は私の大好きな曲なのですが、期待していたものの何百倍、何千倍も素晴らしかった。4楽章の間ずっと体が震えていました。(T.N.さん) 第2ヴァイオリンとヴィオラが上手(舞台向かって右側)に配置されておりましたが、モーツァルトの曲を聞いて、彼がこの古典配置にふさわしい、掛け合い的なユーモラスな作曲をしていることが良く理解できました。CDやDVDでは味わえない面白さでした。(水戸市：S.K.さん) とてもすばらしかったです。ライナー・クスマウルさんのヴァイオリンは胸に迫ってくる感じがします。仕事などで嫌なことがあったりして落ちこんだりしていても、MCOの皆さんの温かい演奏を聞くと、幸せな気分になります。ありがとうございました。(東京都文京区：H.N.さん)

1～4. 水戸室内管弦楽団 第68回定期演奏会 5. 千波湖畔大スクリーン・コンサートの様子  
6～8. 水戸室内管弦楽団 第69回定期演奏会(8は開演前のミニ・コンサート)



\* nettama=ネットワークする猫。タマ。  
芸術館のコンサートをサカナに  
いるんなところへnettamaします。

### 渋さを知らないジャズ

皆さんお久しぶりでございます。休んでいたらあつという間に夏、夏の音楽といえばジャズでしょう。え、夏といえばロック？ ロック・イン・ジャパンはひたちなかでやるし、フジ・ロックもあるしサマーソニックも？ そう夏フェスはすっかりロックで定着したよね。もちろんロック、いいんだけど、10年くらい前までは、ジャズフェスが夏の風物詩だったよな…。フジはフジでも、昔は「マウント・フジ・ジャズ・フェスティバル」だったし。ジョージ・アダムスのテナーが咆哮し、ドン・ブルーノのピアノが爆走して(遠い目)…。ひたちなかジャズ・フェスティバルってのもあってさ、カサンドラ・ウィルソンが歌ったんだよ。ハービー・ハンコックも来るはずだったのに、台風でフェス自体が流れてさ...(涙目)。

今やジャズって、「渋い大人の音楽」って雰囲気だよな。しかし、本当にそうか？ 実はそれだけじゃなかったと思うんだ。こないだ、アメリカっぽい雰囲気を売りにしたレストランに行ったら、ディキシーランド・ジャズがBGMにかかっていた。よく聴くとこれが凄いな。異常な盛り上がり。盛り上がりを宿命づけられているかのような、つまり、日常の苦しみや悲しみを、全力で吹き飛ばそうとしている束の間の祝祭。レコードには残っていないけれど、ルイ・アームストロング全盛期のソロなんて、延々20分も続いたんだって？ ジャズとは、本来そういう音楽だったと思うし、そういう部分はいまだ残っているはずだ。「渋さ知らズ」という集団がなぜ自ら、「渋さ」を「知らない」と言うのか。つまりそれは、ジャズが「渋い」音楽になってしまうことへの、ユーモアを込めた抵抗だと思ふんだ。

そんなわけで、ここから、僕の独断と偏見で「渋さ知らズ」なジャズをご紹介します。まあ、昔のジャズはだいたいみんな熱かったけれど、中でも特に激熱で、しかも(ここが大事だが)祝祭感を持ったものを。つまり「幻想のジャズ夏フェス」であります。どれもジャズ・ファンの方々はよくご存知の名前ですが。

まずはなんとといっても、テナー&ソプラノ・サクソフのジョン・コルトレーン(1927~67)！ この人を聴くとまさに激動の60年代という感じだなあ。ジャズが抵抗の音楽だった頃の、灼熱の祝祭。マイ・フェイヴァリット・シングス を20分も3

0分も、血管の切れそうなソロでひたすら吹きまくるんだから、ジュリー・アンドリュースもびくつきりだ。2時間も3時間もライブで吹きまくったあと、お客が楽屋を訪ねると、コルトレーンまだ吹いていた！ そして彼は40歳で燃え尽きて世を去ったのだった…。僕のおすすめは、最近復刻されたばかりの『マイ・フェイヴァリット・シングス: コルトレーン・アット・ニューポート』(インパルス、輸入盤)。一曲目 アイ・ウォント・トゥ・トーク・アバウト・ユー 後半の無伴奏ソロですでに鼻血が噴出するのを感じるが、数ある中でも最高の名演とされる。マイ・フェイヴァリット・シングス にはもう昇天。さらにその後、ついに完全版として復刻されたこれまた沸騰しまくりのインプレッションズ が続くのだから、何をかいいわんや。それでもまだ足りない方は、晩年の『ライブ・イン・ジャパン』をどうぞ。マイ・フェイヴァリット・シングス だけで1時間。死にます。演奏するほうも聴くほうも。あ、コルトレーンの同僚だったピアニスト、マッコイ・タイナーの70年代作『サハラ』も熱いですよー。

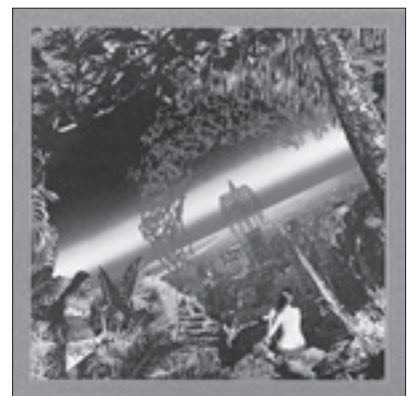
マイルス・デイヴィス(1926~1991)。「エス・マイルス・デイヴィスって、『カインド・オブ・ブルー』で『いつか王子様が』で『マイ・ファニー・ヴァレンタイン』な、クール&ビューティの人でしょう？」はい、確かにそれもあります。しかし1969年から75年までのマイルス・デイヴィスは、それはそれは熱いのです。この時期マイルスは、「ジャズはこのままじゃいけねえ、ロックなど蹴散らす真のブラック・ミュージックにならなくちゃいけねえ」と考え、ロックやらファンクやらソウルやら、ブラック・ミュージックのあらゆるエッセンスをぶち込んで大釜でぐらぐら煮立てたようなものすごいサウンド・スケープを次から次へとぶちかましていた。一枚一枚アルバムへの傾向がまるで違うが「祭り度」の高さという点で言えばキース・ジャレットとチック・コリアのツイン・キーボードがうなる『ライブ・アット・フィルモア』、ファンク暴走族というべき『ライブ・イヴィル』、ヒップホップを先取りした上シタールまで鳴りわたる『オン・ザ・コーナー』、燃え尽きて6年間の引退を余儀なくされる直前の、地獄(天国?)の蓋が開いたような壮絶ジャズ『ライブ・アガルタ』、『パンゲア』あたりだろうか。体力は要るが、ブラック・ミュージックの桃源郷(もしくは魔境)めぐりとして一度は体

験されたい。ただし最初は『イン・ア・サイレント・ウェイ』(テクノ&アンビエント的にクール)、『ピッチェズ・ブリュー』(豊穣なるブラック・ビューティ宣言)、『ジャック・ジョンソン』(これぞマイルスのロック)あたりから入るのが王道かな(以上すべてソニー)。

アート・アンサンブル・オブ・シカゴ。1960年代から活躍しているフリー・ジャズ・グループ。アフリカ濃度の高さという点では上記の2人を上回る。トランペット、サクソフ類(やたら種類多し)、ドラム、パーカッション(めったやたらに種類多し)ベースという編成で、アフリカ部族風のボディ・ペインティングをして、めちゃくちゃファンキーなフリー・ジャズ。かなりアヴァンギャルドなことをやっているのに、妙にお祭り感がある。プリジット・フォンテーヌの名盤『ラジオのように』に参加していたりするが、僕が一番好きなのは70年代末から80年代初頭にかけてECMレーベルに録音していた頃。ライブ『アーバン・ブッシュメン』(タイトル最高)もいいが、最高傑作は『フル・フォース』ではないか。冒頭の壮大なフリー・ジャズ交響楽。マグ・ゼルマから、突如ディキシーランド・ジャズの記憶が甦る。ケア・フリー になだれこむところは何度聴いても最高だ。

おおっと、もう字数がない。サン・ラとかオーネット・コールマンとか山下洋輔とか、最近だったらメデスキ、マーティン&ウッドとか、触れたい人はいくらでもいるが無念。そして言いたいのは、もうお分かりでしょう、「渋さ知らズ」こそは、こうしたジャズ本来の「祭りの高揚感」を現代において未曾有のパワーで体現している、ということ！

マイルス・デイヴィス『アガルタ』[ソニー]  
\*ジャケットは横尾忠則のデザイン！



## information

### チケットに関するお問い合わせ

...水戸芸術館チケット予約センター / 029-231-8000

営業時間 / 9:30 ~ 18:00(月曜休館)

### 公演内容や企画に関するお問い合わせ

...水戸芸術館音楽部門 / 029-227-8118

【ATM便り】毎月1回茨城新聞に不定期登場。

NHK-FM水戸「芸術よもやま話」金曜日18:15頃~15分ほど。水戸周辺83.2MHz、日立周辺84.2MHz。

茨城放送「タッチ・ミー・イン・ザ・モーニング」内「タッチ・ザ・クラシック」毎週水曜日・朝6:50頃から約10分間 水戸周辺1197kHz、土浦周辺1458kHz

### チケット・インフォメーション 7月28日(土)発売分

水戸室内管弦楽団第70回定期演奏会

11/10(土)18:30開演、11/11(日)14:00開演

料金(全席指定):S席¥6,500 A席¥5,000 B席¥4,000

水戸室内管弦楽団第71回定期演奏会

11/24(土)18:30開演、11/25(日)14:00開演

料金(全席指定):S席¥6,500 A席¥5,000 B席¥4,000

第70回と第71回のセット券(限定300セット):S席¥12,000 A席¥9,000

水戸芸術館のみの取り扱いです。

水戸室内管弦楽団定期演奏会には、7月24日(火)より友の会維持会員、7月25日(水)より友の会一般会員の先行電話予約がありますので、7月28日(土)の一般発売の時点で券種によってはお客様のご希望に添えない場合があります。予めご了承下さい。

### これからの演奏会・残席情報

○...残席あり(20席以上) ...残席わずか(20席未満) x...残席なし 中央...中央ブロック 左右・裏...左右ブロックおよびステージ裏 補助...補助席

渋さ知らズオーケストラ[会場:水戸市民会館]

8/10(金).....

茨城の名手・名歌手たち 第18回 9/8(土).....自由席

ピエール・ブーレーズの肖像 9/14(金).....中央・左右

映画『ロストロポーヴィチ 人生の祭典』 9/20(木).....自由席

第46回あひるの会合唱団定期演奏会 9/23(日).....自由席

ミリヤム・コンツェン 無伴奏ヴァイオリン・リサイタル

9/28(金).....中央・左右・裏

マリオ・プルネロ 無伴奏チェロ・リサイタル

10/6(土).....中央・左右・裏

山口泉恵・弘中孝 ピアノ・デュオ・リサイタル

10/8(月・祝).....自由席

ATMアンサンブル第22回演奏会 10/16(火).....中央・左右・裏

班目加奈トランペット・リサイタル 10/28(日).....自由席

7/4(水)現在の状況です。

公演当日に残券がある場合、開演1時間前より水戸芸術館チケットカウンターでお得な学生券を発売いたします。ご購入の際には学生証(記名章)をお持ちください。公開セミナーなど、学生券のない公演もございますので、予めお問い合わせ下さい。

固定席が売り切れ次第、補助席を販売いたします。

### 水戸芸術館の主な8・9月のスケジュール

前号vivo126号チケット・インフォメーション欄にて、「茨城の名手・名歌手たち第18回」の開演時間を誤って18:30開演と記載しておりますが、正しくは18:00開演です。お詫びとともに訂正いたします。

### コンサートホールATM

渋さ知らズオーケストラ[会場:水戸市民会館 TEL/029(224)7521]

8/10(金)19:00開演 料金(全席指定):¥3,500

水戸市芸術祭 水戸ジュニアオーケストラ第30回定期演奏会

8/12(日)14:00開演 料金(全席自由):¥500

水戸市芸術祭 少年少女合唱祭

8/19(日)14:00開演 料金(全席自由) 入場無料

高校生音楽講座in水戸芸術館2007

第4回「いま世界ではどんな音楽がつかられ、どこに向かおうとしているのか?」

8/23(木)17:00~19:00 参加費:1回券¥200

水戸市芸術祭 茨城交響楽団 水戸芸術館公演

9/2(日)14:00開演 料金(全席指定):A席¥2,000 B席¥1,500

茨城の名手・名歌手たち 第18回

9/8(土)18:00開演 料金(全席自由):¥1,500

ピエール・ブーレーズの肖像

9/14(金)19:00開演 料金(全席指定):一般¥4,000 学生(大学生以下)

¥1,000 ペア券(限定100組)¥7,000

第46回あひるの会合唱団定期演奏会

9/23(日)14:00開演 料金(全席自由):一般¥1,500 高校生以下¥700

BACHのための4人 その3・Clarity(明晰さ)

ミリヤム・コンツェン 無伴奏ヴァイオリン・リサイタル

9/28(金)18:30開演 料金(全席指定):¥3,000

マリオ・プルネロ無伴奏チェロ・リサイタル[10/6(土)]とのセット券¥6,000

### エントランスホール

パイプオルガン プロムナード・コンサート

8/11(土)13:30/15:00 8/25(土)13:30/15:00

(9月未定)

夏休みスペシャル

8/26(日)12:00/13:30 オルガン:浅井美紀

入場無料 演奏は各回20分程度です。

### ACM劇場

水戸市民演劇学校卒業公演『ロミオ・アンド・ジュリエット』

9/8(土)19:00開演、9/9(日)14:00開演 料金(全席自由):¥1,500

第11回水戸短編映像祭 9/15(土)~9/17(月・祝)

詳細はお問い合わせ下さい。TEL/029(227)8111(代)

[BACHのための4人 関連企画・特別上映

映画『ロストロポーヴィチ 人生の祭典』 9/20(木)19:00~20:55(プレトークあり)

料金(全席自由):¥1,200

ミリヤム・コンツェン無伴奏ヴァイオリン・リサイタル[9/28(金)]もしくはマリオ・プルネロ無伴奏チェロ・リサイタル[10/6(土)]のチケットと一緒に購入すると¥200引き

友の会第47回鑑賞会 ミュージカル『ラスト・ファイヴ・イヤーズ』

9/22(土)18:30開演、9/23(日)14:00開演

料金(全席指定):一般¥7,500 友の会一般会員¥6,500

### 現代美術センター

水戸市芸術祭 美術展覧会

第2期【書・写真・デザイン・インスタレーション】

7/25(水)~8/5(日)9:30~18:00(入場は17:30まで)

休館日:月曜日 入場無料

「ひびのこづえの品目 -たしひきのあんばい」展

8/18(土)~10/14(日)9:30~18:00(入場は17:30まで)

休館日:月曜日ただし9/17、9/24(月・祝)は開館、翌9/18、9/25(火)は休館。

料金:一般¥800 前売・団体(20名以上)¥600

中学生以下・65歳以上・各種障害者手帳をお持ちの方と付き添い11名は無料

### 茨城の主な8・9月の演奏会

有料公演のみ

佐川文庫 TEL/029(309)5020

サロンコンサート リサ・ユイ ピアノ・リサイタル 8/4(土)18:00開演

茨城県民文化センター TEL/029(241)1166

馬高彦・二胡コンサート 9/24(月・祝)14:00開演

ひたちなか市民会館 TEL/029(275)1122

DIE KREISE ベートーヴェン ピアノソナタ全32曲演奏会 第5回

9/30(日)18:00開演

(問)横川 TEL/029(251)2904

ギター文化館 TEL/0299(46)2457

北口功 ギターリサイタル 9/2(日)15:00開演

菅原英介 ピアノコンサート ゲスト:菅原洋一 9/9(日)15:00開演

ノバホール TEL/029(852)5881

第23回つくば国際音楽祭ふれあいコンサート「パッパが街にやってきた」

9/2(日)14:00開演

第23回つくば国際音楽祭 ベルリン・フィルハーモニー・プラス・クインテット

9/28(金)19:00開演

フェルメール・クワルテット 9/29(土)15:00開演

坂東市民音楽ホール・ベルフォーレ TEL/0297(36)1100

トルヴェール・クワルテット 9/30(日)14:00開演

水戸芸術館音楽紙[ヴィヴオ] 2007年7月発行 第127号

編集・発行/水戸芸術館音楽部門 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8

TEL:029-227-8118 FAX:029-227-8130

e-mail [ankmr@arttowermito.or.jp] URL [http://www.arttowermito.or.jp]

編集/水戸芸術館音楽部門(五十音順):佐川真美 関根哲也 中崎美智代 中村 晃

矢澤孝樹(編集長)

DTP / office west

印刷所 / 株式会社あけぼの印刷社

次号は...  
秋のコンサート・ラッシュ!